

大学生の防犯意識の形成について

—リスク認知と犯罪不安の関連性—

0707027

小山 雄司

【目的】

日常生活における防犯行動の研究において注目されるのは、日常生活の行動に影響を与えるのは、犯罪不安なのか、リスク認知なのかということである。つまり、犯罪に対する不安が高いほど、日常生活の行動が抑制され、防犯行動が行われるのか、リスク認知が強いほど、日常生活の行動が抑制され、防犯行動が行われるのかという点である

ここでいう犯罪不安とは一般的に、自分が犯罪の被害者になることへの不安である。また、リスク認知とは一般的に自分が犯罪に遭遇する確率の見積もりのことである。笹竹(2008)は risk interpretation model を元に、リスク認知、犯罪不安、犯罪情報への関心、防犯意識の4つを潜在変数とした構造方程式モデリングを提唱した。

本研究では笹竹の提唱する構造方程式モデリングを使用し、先行研究との結果を比較する。そのうえで被験者個人が考える具体的な犯罪の発生率、その不安の程度を個別に評定させ、個別の犯罪について、犯罪不安とリスク認知のズレが生じやすい犯罪を検証する。それにより、本校の学生の防犯意識をより高めるために喚起すべきは犯罪不安なのか、リスク認知なのかを検証する。

【方法】

私立大学の学生1~4年生までの計196名(男性93名、女性103名)に対して、質問紙による調査を行った。

被験者に対し、街頭犯罪と称される犯罪に加えて大学生が身近に遭遇する可能性のある犯罪、社会にも重大な影響を与えかねない犯罪などを例に挙げ、窃盗、傷害、空き巣、ひったくり、架空請求、痴漢、盗撮、粗暴犯被害、詐欺、たかり、その他の犯罪(殺人、誘拐など)の11種類の犯罪について、自らの考える一般的な発生頻度と感じる犯罪不安について、5件法で回答を求めた。また、同時に笹竹の構造方程式モデリングによるモデルを使用し、防犯意識について

検証した。

【結果と考察】

同一の犯罪について、リスク認知得点と犯罪不安得点の間に差があるかを検証するため、T検定による比較を行った。結果、有意な差が認められたのは5種類で架空請求($t(190)=6.99$, $p<.001$)、痴漢($t(190)=6.56$, $p<.001$)、盗撮($t(190)=3.44$, $p<.001$)、詐欺($t(190)=2.22$, $p<.05$)の4種類の犯罪はいずれもリスク認知得点が高かった。またその他の犯罪($t(190)=-2.79$, $p<.01$)は犯罪不安得点有意に高かった。

男女間で有意な差があったのは、リスク認知得点では空き巣($t(92)=2.57$, $p<.01$)のみで男性群の得点が高く、犯罪不安得点では盗撮($t(92)=1.36$, $p<.05$)のみで女性群の得点が高いことがわかった。

構造方程式モデリングによるモデルについての質問項目9項目に対して、構造方程式モデリングを用いて検証的因子分析を行った。

結果、被験者全体、男性、女性ともに犯罪不安~防犯意識間の標準化パス係数は有意であり、被験者全体では.47($R^2=.49$)、男性群では.36($R^2=.57$)、女性群では.41($R^2=.42$)という値を示した。この結果は、犯罪不安が社会的行動に直接的に影響を与えると考えた risk as feeling model を支持するものである。

本校の学生は犯罪不安が防犯意識意に結びつきやすく、リスク認知は犯罪情報への関心に結びつきやすい。防犯意識を総合的に高めるには、より具体的な犯罪被害情報を共有し、正しいリスク認知を持つとともに、どんなに低い確率でも自分に起こりうることとして認識させるよう、意識させなければならない。

(指導教員 豊村 和真 教授)